

京 都 光 華 女 子 大 学
研究紀要 第45号 抜刷
平成19年12月 5 日 発行

「アテネ文庫」の研究（その2）・各点調査Ⅰ

清 水 康 次

「アテネ文庫」の研究（その2）・各点調査Ⅰ

清 水 康 次

今回から、順に「アテネ文庫」の各点についての調査報告を行っていく。今回報告するのは、以下の8点である。

第1編	久松真一	『茶の精神』	1948（昭和23）年3月25日発行
第2編	寿岳文章	『河上肇博士のこと』	同上
第3編	深田康算	『美しき魂』	同上
第4編	西田静子・上田弥生	『わが父西田幾多郎』	同上
第5編	木村素衛	『花と死と運命』	同上
第6編	青木正児	『抱樽酒話』	同上
第7編	高坂正顕	『実存哲学』	同上
第8編	ヨハネス・ラウレス	『きりしたん大名』	同上

凡 例

一 調査報告は、各点について、1「書誌」、2「著者紹介」、3「内容のあらましと問題点」、4「補足説明」に分かって、必要事項を記述する。

二 「書誌」においては、まず、初版についての書誌的事項の概略を記し、その後の刊行の経過をたどるために、見ることができた重版について発行年月日を記し、初版との相違点がある場合にはそれを記す。「ラストノブル」は、印刷された頁番号の最後のもので、これによって当該書の総頁数に代える。なお、発行所・発行者等の記述（例えば、「弘文堂書房」と「弘文堂」などの記述）は奥付に依拠するものとする。また、重版での印刷者については省略する。

三 「著者紹介」はその著者についての生没年月日、経歴、業績、著作など

を略述する。特に、「アテネ文庫」の刊行当時の状況や、当該書にかかわる事柄、出版社弘文堂書房や編集者との関係について紙数を割くこととする。

四 「内容のあらましと問題点」では、当該書の構成を示し、初出・出典や、刊行に至る経緯を述べ、収録作品（あるいは論文・日記等）の概略・要点と問題点を述べる。単に概略的に総括するだけでなく、なるべく具体的に記述する部分を作り、本文の引用箇所を少なくとも1箇所は設けて、当該書の雰囲気を伝えられるように努める。また、収録作品（あるいは論文・日記等）について、当該書以降の収録、再刊行があれば、記載する。

五 「補足説明」では、さらに当該書や著者について特記すべき事柄があれば言及する。

なお、各点の記述に長短の差が生じてくるが、筆者の問題意識に応じたものとして了承していただきたい。

1 久松真一『茶の精神』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 中内佐光、[定価] 15円、[ラストノンブル] 57、[表紙の色] 緑色系。

重版 4版 1951（昭和26）年10月30日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 酒井明、[定価] 30円、装丁が変わる、色は同系。巻末に



初版表紙



6版表紙

「アテネ文庫 目録」「アテネ新書」のリスト、計5頁を付加。

6版 1958（昭和33）
年2月15日発行、[発行所]
弘文堂、[発行者] 八坂浅
太郎、[定価] 30円、装丁
は4版と同じ。巻末に



6版の帯

「アテネ文庫小辞典」「アテネ文庫 目録」のリスト、計6頁が付加。

10年以上にわたって刊行を続けたロングセラーであることが確認される。

著者紹介

久松真一 ひさまつ・しんいち 1889（明治22）.6.5～1980（昭和55）.2.27
宗教学者、哲学者。号は抱石庵。

1915（大正4）年、京都帝国大学哲学科卒業。着任直後の西田幾多郎の講座
に出席し、深く感銘する。卒業の頃、種々の問題に苦しみ、西田に紹介された
妙心寺僧堂師家池上湘山^{いけがみしょうざん}のもとで禅の修行にはげみ、行きづまりを脱出する。
1919（大正8）年、臨済宗大学（現在の花園大学）の教授となり、さらに、龍
谷大学教授を経て、1937（昭和12）年、京都帝国大学助教授。1937（昭和14）
年12月、主著の1つである『東洋的無』を弘文堂書房より刊行。以降、宗教哲
学者・宗教家として活発な活動を行ない、戦後の思想界においても、「無相に
して自在なる真の自己」を掲げて活動し、大きな影響をもたらした。

著作としては、『東洋的無』のほか、『起信の課題』（1947、弘文堂書房、教
養文庫）、『絶対主体道』（1948.4、弘文堂書房）、キリスト教神学者の八木誠一
との対談『覚の宗教^{かく}』（1980.2、春秋社、のち増補、1986.6、春秋社）など。
『久松真一著作集』全8巻（1969-80、理想社）、『増補 久松真一著作集』全
9巻別巻1（1994-96、法蔵館）があり、久松のエキスを集めた選集として、
燈影舎刊の「京都哲学撰書」第21巻『覚の哲学』（美濃部仁編、2002.4）第29
巻『芸術と茶の哲学』（倉沢行洋編、2003.4）がある。

「アテネ文庫」刊行の頃は、敗戦と西田幾多郎の死という2つの衝撃を受け
とめた時期であったが、その内面は充実し、著作を重ねつつ、多方面に進出し

ようとした時期であったといえる。

川崎幸夫は、『増補 久松真一著作集』第9巻（1996.3、法蔵館）の「後記」において、主に『起信の課題』に注目しつつ、「昭和二十二年頃の著者の思想的立場」を探り、その頃の久松の活動には、「京大退官を間近かに控えた著者の烈たる意気込みが張りつめているのを感じさせられる」とし、次のように述べている。

昭和二十二年に書かれた「能動的無」において、ドストエフスキーやハイデガーにおける現実否定の在り方が批判されているところから、「無神論」の立場は執筆の数年前から熟成されつつあったことは十分に考えられる。

かくして教養文庫版の『起信の課題』の整理が終りに近づいていた時、著者の哲学は西洋的「有の論理」を超脱して、哲学そのものの転換を成就していたのであり、昭和二十六年の初頭に公表された「人類の誓」から昭和三十三年におけるFAS禅の宣言へと向う道筋が將に開かれんとする地点に立っていたと考えてよいであろう。（P619）

内容のあらましと問題点

本書は、「茶道文化の性格」（P 3－14）と「わびの茶道」（P 15－57）という2編の講演筆記・座談筆記から成る。巻末（P 57）に、それぞれの講演・座談についての付記があり、著者についての簡単な紹介がある。1つ目の講演は、「国際茶道文化協会」における講演で、日時は記されていない。『増補 久松真一著作集』第4巻（1995.5）の「後記」では、「昭和二十二年と推定されるが未確認」と記されている。「である」体の論文形式の筆記である。2つ目の座談は、1948（昭和23）年1月16日、京都鹿ヶ谷法然院茶室（金毛窟）で行われた座談会の筆記で、久松の講話とその後の質疑（「対談」P 45－57）が、「です」体で口語的に記されている。質疑の質問者の氏名は記されていない。上記『著作集』の「後記」には、「深瀬基寛氏、鈴木成高氏、八坂浅太郎氏、臼井史朗氏などが同席」とある。このうち、八坂浅太郎は弘文堂書房の社長、臼井史朗は同社の社員である。

この2編は、『増補 久松真一著作集』以外に、『わびの茶道』（1987.5、燈

影舎)にも収録され、再刊行されている。同書の「あとがき」において、倉沢行洋は、「アテネ文庫（弘文堂刊）の第1冊として昭和二十三年に刊行され、岡倉天心の『茶の本』以来の名著として、ベストセラーになった」と紹介している。

「茶道文化の性格」(P 3-14)では、著者は、まず、茶道文化を「抹茶を服することを契機として創造せられた、総合的文化体系である」とし、「その中に芸術も、道徳も、哲学も、のみならず宗教までも含まれてゐて、文化のあらゆる部面において、茶道はすべてを吸収して」と述べる。そして、その特色として、「不均斉」「簡素」「枯高」「自然」「幽玄」「脱俗」「静寂」の7つの特色を挙げてそれぞれを説明し、7つの特色は、「もと全く一つの根源から出てゐる」、「この一なるものとは即ち「無」である。無こそは日本茶道文化をつくりあげた創造的根源である。」とする(P 12)。その一方で、「今日の茶道にはこの最も大切な無が全くない」(P 13)と、批判している。

「わびの茶道」(P 15-57)では、同様の主張が、より敷衍した形で、より平易に語り直されてゐる。

……佗数奇と続いてさうして一つのものになつた。それがつまり、日本文化を創造する根本精神といひますか、さういふ主体的なものになつて、さうしてそのものが茶人の主体的精神といふやうなものになつてきて、色色のものを創造してきた。(P 25)

その「創造的」な「主体」が、茶碗や茶杓などの道具に働きかけ、同様に、庭や生け花、人の動作にまで作用し、それぞれのあるべき形を模索しつつ体系化していった、茶道文化という「総合的文化体系」を形成したと説明する。その上で、「佗数奇の精神といふものが、一体どこから出てきたか」と問うと、「矢張り禅といふものの以外にはさういふものの根拠が求められない」(P 39)としている。

付載された「対談」(P 45-57)では、質問者は、意外に鋭い質問を久松に向けており、久松が答に窮して、反復的な返答しかできない場面もある。

なお、茶の文化の特色と禅の本質とが共通するというこの主張は、その後、禅の側からも繰り返して述べられており、『禅と美術』（1958.1、墨美社、のち、1976、思文閣より再刊）などにまとめられていく。

補足説明

久松真一と西田幾多郎とのかかわり、また京都学派の後輩たちとのかかわりについては、数多くの文章が書かれている。そのうちのいくつかを挙げておくと、山内得立「久松君のこと」、下村寅太郎「春光院時代の久松真一老漢」、西谷啓治「久松先生の思い出」（いずれも藤吉慈海・倉沢行洋共編『増補版 真人久松真一』（1991.8、春秋社）収録）、下村寅太郎「久松真一—ある日の—」（下村『遭遇の人』（1970.3、南窓社）所収）、など。

木村素衛の日記抄「夕映」（木村『花と死と運命 日記抄』（1966.1、木村素衛先生日記抄刊行会）収録）では、西田の通夜（1945（昭和20）年6月9日）の席で、久松が読経した様子が記され、「三拝が了つてから久松さんは「先生、ありがたう御座居ました」と、はつきり言つて一礼して去つた。それはうやうやしくあると同時に深いなつかしみのある言葉であつた」と記されている。

2 寿岳文章『河上肇博士のこと』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 中内佐光、[定価] 15円、[ラストノンブル] 61、[表紙の色] 赤－茶色系。

重版 3版 1949（昭和24）年7月10日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 久保井理津男、[定価] 30円。巻末に「アテネ文庫」のリスト1頁を付加。

著者紹介

寿岳文章 じゅがく・ぶんしょう、1900（明治33）.3.21～1992（平成4）.1.16
英文学者、翻訳家、書誌学者、和紙研究者。

1923（大正12）年、関西学院高等学部英文科卒業。1927（昭和2）年、京都帝国大学文学部選科修了。選科在学中、河上肇の長男政男の家庭教師となる。また、新村出の知遇を得、のちに新村が主唱して結成された和紙研究会の中軸として活動する。柳宗悦とも親しく交わり、1931（昭和6）年には、二人で月刊誌『ブレイクとホキットマン』（1931.1－32.12、全24号）を編集発行している。

龍谷大学、関西学院大学、甲南大学の教授を歴任。幅広い分野で活躍し、多数の著作を遺した。大久保久雄・笠原勝朗編『壽岳文章書誌』（1985.1、寿岳文章書誌刊行会）では、個人での著書と翻訳だけで87点を数えている。いくつかを拾っておくと、『エルヤム・ブレイク書誌』（1929.4、ぐろりあ・そさえて）、『書誌学とは何か』（1930.10、ぐろりあ・そさえて）、『書物の世界』（1949.6、朝日新聞社、のちに改訂版、1973.8、出版ニュース社）、『日本の紙』（1967.4、吉川弘文館、「日本歴史叢書」14）、訳書『神曲』（1971.1、75.6、76.11、集英社）など。しづ夫人との共同の著作集『壽岳文章・しづ著作集』全6巻（1970、春秋社）があり、書誌学関係の文献を集めた『壽岳文章書物論集成』（1989.5、沖積社）がある。なお、「アテネ文庫」とのかかわりとしては、もう1点、第47編『この英国人—ウイリアム・コベツトの場合—』（1949.3）という著作を執筆、刊行している。

内容のあらましと問題点

本書に収められた文章の初出は、巻末（P61）の「あとがき」に記されているが、1946（昭和21）年12月号『展望』に掲載された「私の知る河上肇博士」である。河上の死は、1946（昭和21）年1月30日。翌31日の『朝日新聞』は、「左翼論壇の雄、元京大教授河上肇博士は京都市左京区吉田上大路町の仮寓で三十日老衰と栄養失調のため死去した、享年六十八」と報じている。寿岳の初出文は、この死を受けて書かれた追悼文で、初出の文末には「一九四六、八、七稿了」の記載がある。「左翼論壇」とは異なる立場からの追悼文であることが、「私の知る」という表題に示されている。本書の「あとがき」に、「アテネ文庫」収録にあたって、「かなりの訂正増補を加へた」と記されているように、



河上 肇 (1879～1946)

特に後半部分の晩年の河上の様子が、いくつかの書簡やエピソードを含めて書き加えられている（P 49－61）。本書の末尾には、加筆訂正の稿了日として、「昭和二十二年十二月二十九日」という記載がある。なお、本書の全文は、のちに、『壽岳文章・しづ著作集』第3巻『よき人を語る』（1970.5、春秋社）に収録されている。

寿岳は、まず、自分と河上との交際をその出会いからふり返り、石田憲次を介して、著者の翻訳したチェルトコフ「晩年のトルストイ」の出版の世話を河上に

依頼したことから書き始め、河上の人物像を強い調子で語る。寿岳は、「指標の動揺と思想の彷徨は、畢竟求道者の背負はねばならぬ十字架である」としつつ、世の評価に抗するように、次のように語る。

河上博士には絶えざる ^{コンヴェンション} 回心 はあつたが、唾棄すべき転向の踏絵の醜さは、生涯を通じて遂に一度もなかつた。多くの失敗を重ねたが、自己の所信への、天地に愧づべき裏切りは嘗て一度も無かつた。誠実の人であり、清い人であつたからである。（P 6－7）

続いて、長男政男の家庭教師を勤めた経緯を記し、1926（大正15）年の政男の死以後の河上について、「博士の行動には、講壇の人としての従来の博士に見られなかった毅然たる実践の情熱が、恰も堤を切つて流れる水のやうに奔流し始めた」（P23）と述べる。1929（昭和4）年12月、河上は京都帝国大学を辞し、翌年上京。共産党活動に身を投じ、1933（昭和8）年、入獄する。そして、1937（昭和12）年の出獄。古田光は『河上肇』（『近代日本の思想家』8、

1959.2、東京大学出版会）において、「河上が検挙された昭和八年は、そうした「転向」の開幕期であった」とし、次のように述べる。

検挙されて後、河上は二度「自己埋葬の辞」を書いている。一つは「獄中独語」であり、それは昭和八年（一九三二）七月二日、第一回公判を目前にして、市ヶ谷刑務所で書かれたものである。もう一つは「出獄の手記」であり、それは昭和一二年（一九三七）六月一五日、三年九カ月の刑期を満了して、小菅刑務所を出る際に発表したものである。前者は「マルクス主義者」としての、後者ではさらに「マルクス学者」としての自己を葬っている。「公人」としての河上は、河上自身の手で葬られた。それ以後の河上の生涯は、「私人」としての、「隠者」としての生涯である。

そのようにして、河上は、「公人」としての活動の中止を宣言し、「閉戸閑人」と称す。のち、1946（昭和16）年末には、十数年ぶりに京都に転居。これ以後、寿岳との交遊も再開される。

本書における寿岳の文章は一貫して強い文体で書かれ、思想への共鳴者としてではなく、その生き方への称揚者としての姿勢が貫かれる。著者は、「博士は強い信念の人であつたが、透徹した理論への飽くなき追求者ではなかつた」。「かうした稟性が、（中略）博士へ逆説的に働きかけ、現実の把握に於いて往々ドン・キホーテ風の甘さを博士に結果する」（P31-32）という批判をも交えて、「謹厳、誠実、信義、友愛など、新しい時代の建設にも無くてかなぬ美德」を備えた「古武士的人格」（P34）と捉え、その死を惜しみつつ、その生を追慕している。さらに、「博士への私の追慕は、その思想ではなしに、思想を実践しようとした一途な人がらにつながる」（P40）とし、「戦禍をまぬがれた京洛の片ほとりに、佗しい自炊生活をされる博士を時折おとづれて、いささかなりとも晩年風雅の友となり得てゐたら、私の願ひは足る」（P46）と記している。

補足説明

寿岳には、他に河上について述べたものとして、①「氷川町時代の先生」（堀江邑一ほか編『回想の河上肇』（1948.3、世界評論社）所収）、②「河上肇

論』（『現代日本文学全集』第52巻『中江兆民 大杉栄 河上肇集』（1957.4、筑摩書房）所収）、③「私の処女作と河上肇博士」（『読売新聞』1974.4.28、日曜版）などがある。①は、1939（昭和14）年7月、出獄後東京の中野区氷川町に暮らしていた河上を訪れた頃の日記を抄録したものであり、③では、処女出版「晩年のトルストイ」のこと、長男政男のことが改めてふり返られている。

寿岳文章の「間接の思い出など」（『西田幾多郎全集』（岩波書店、第二次刊行）第14巻「付録」（月報、1966.3）に掲載、のちに下村寅太郎編『西田幾多郎一同時代の記録』（1971.12、岩波書店）に収録、また、「現代の随想」第23編『寿岳文章集』（寿岳章子編、1983.2、弥生書房）に収録）は、自身と西田幾多郎とのかかわりを回想した文章である。

この文章において、寿岳は、京都大学在学時代に、「週三十数時間も中学で教えながら大学の課程を了えようとする苦学生 of 私」には「時間のゆとり」がなく、西田の講義を受けられなかったことを記し、「今も恨事とする」と述べる。「ただ当時の私の友人に、故木村素衛君と下村寅太郎君がいたおかげで、直接西田先生の講義は聞かなくても、また聞けなくても、先生のイメージだけは、いつもくっきりと私の脳裏にあった」とし、「日本英文学会の大会」での講演で初めて「講壇の上の先生」を見たときにも、「私にはいつも聞きなれているような親しさがしみ通った」と往時の西田の姿を懐かしんでいる。

この自分と西田とのかかわりを記した後で、「しかしここに、どうしても書きしるしておきたいのは、晩年の河上肇博士を遇された先生の態度のこと」と述べ、話題を河上と西田とのかかわりに移していく。

西田・河上両博士が、京大の象徴のように言われ、この両先生を慕ってわざわざ東大ではなく京大へ来る学生も多かった時代に、前述のような事情で、文学部にありながら私は西田先生の講義を聞けなかった。しかし運命は、私を河上博士の身辺へ結びつけてしまった。（中略）それ以来、博士が六十七年の生涯を閉じられるまで、博士と私との交わりは絶えなかった。

寿岳は、西田が、河上の「山口高校に在学した折のドイツ語の先生」であっ

たことに言及する。そして、晩年の二人について、「西田先生は、京都から鎌倉へ居を移される直前、是非会いたいとの切望」を伝え、1944（昭和19）年6月16日、面会が実現したことを記している。

西田先生は、よく来たと手を取らんばかりに河上博士を招じ入れ、あらでものいたりや遠慮はいっさい抜きにして、つまり河上博士の言葉を借りれば、「わしの全人格をそのまま受け入れて」談論風発されたと言う。（中略）河上先生には、それがよほどうれしかったらしい。

翌年の6月7日、西田幾多郎が没し、翌々年の1月30日、河上肇が没する。そのような時期での面会であった。

河上は、その初期のベストセラーである『貧乏物語』（1917.3）を弘文堂書房から刊行しているが、弘文堂書房にとっても、このベストセラーは出版社として初めての体験であり、経営方針を変えて、一般市場に乗りだし、大出版者に成長していくきっかけとなった。その後、河上は、京都大学在職期間中のほとんどの著作や翻訳を弘文堂書房から刊行している。『社会問題管見』（1918.9）、『唯物史観研究』（1921.8）、『資本主義経済学の史的発展』（1923.8）、『資本論入門』第1巻第1分冊から第8分冊（1928.4～29.2）などである。河上と弘文堂書房とのかかわりは強く長い。寿岳が「晩年のトルストイ」の翻訳原稿を河上に見せたのも、「弘文堂からでも出版して貰ふやうに頼まう」と考えてのことであった。一方、西田幾多郎は、1936（昭和11）年に刊行が始まる「西哲叢書」の後ろ盾であり、彼と田辺元の教え子たちが著者リストに並んでいく。弘文堂書房にとっても、二人は双壁であったといえる。「アテネ文庫」は、二人の死後に創刊される。その創刊時において、第2編の河上への追悼と、第4編（『わが父西田幾多郎』）の西田への追悼とが並立する。寿岳たちにとっても、より若い京都学派の後輩たちにとっても、弘文堂書房にとっても、二つの巨星であった、河上肇と西田幾多郎の死を哀悼し、その生の足跡をたどることから、「アテネ文庫」は出発していくのである。さらに、第3編の深田康算の著作、

第5編の木村素衛の日記抄も、先に逝った者への追慕と捉えることができる。先人たちの死を確認し、追悼することから、この叢書は船出するといえる。

3 深田康算『美しき魂』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 中内佐光、[定価] 15円、[ラストノンブル] 62、[表紙の色] 赤－茶色系。

重版 3版 1949（昭和24）年7月10日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 久保井理津男、[定価] 30円。巻末に「アテネ文庫」のリスト1頁を付加。

3版の刊行年月日等は第2編の『河上肇博士のこと』の場合と同じであり、1年あまりで2度増刷されている。この2点もよく売れたことが知られる。

著者紹介

深田康算 ふかだ・やすかず、1878（明治11）.10.19～1928（昭和3）.11.12
美学研究者、哲学者。

1902（明治35）年、東京帝国大学文科大学哲学科卒業。ラファエル・ケーベルに師事し、ケーベル宅に5年間寄寓する。1907（明治40）年5月、ドイツ・フランス留学に出発し、1910（明治43）年帰国。京都帝国大学文学部教授に就任し、美学美術史の講座を担当。日本における近代的美学研究の基礎を作った。1928（昭和3）年11月、患っていた肋膜炎に腹膜炎を併発し、京都大学在任中に死去（51歳）。

生前には研究をまとめた著書は刊行されていなかったが、没後、中井正一らの弟子・教え子たちによって、『深田康算全集』全4巻（1930－31、岩波書店）が編集、刊行された。のちに、同全集を増補、再編集した、『深田康算全集』全3巻（1972－73、玉川大学出版部）がある。

没後の刊行としては、「アテネ文庫」に、本書以外に、第79編『ロダン』

(1949.9)があり、同時期に、『芸術に就いて』(1948.12、岩波書店)がある。『芸術に就いて』は、もと「芸術一般」と題された講演筆記（講演は1924（大正13）年5月）であり、岩波本全集にも収録されている1編の単行本での刊行である。この1編は、深田の研究の核心をわかりやすく示したものとして支持され、のちに、『美と芸術の理論』と改題されて再刊されている（1971.1、白鳳社）。

「アテネ文庫」の本書の巻末には、この文庫にしては長文の「著者略歴」が掲載されている。

若き頃ケーベル博士に学び、同門下に群がる俊秀の中でも師の寵愛最も深く、その家庭内に起臥すること五年、両者の師弟関係が世の常のごときものでなかつたことは、本書に収められた「追憶」の中にも窺われるであらう。深く酒を愛し、その顛脱せる風格と天才的な学風とは、西田幾多郎博士の傍にあつて当時の講壇に異彩を放ち学生達の尊敬の的であつた。にもかかわらず博士は生前一冊の著述をも自ら世に公にすることがなく、ただ黙々として内に向けられた世界にのみ沈潜したのである。（P 61－62）

この文章の執筆者は未詳。深田の京都大学着任は西田幾多郎と同年（1910（明治43）年）であり、当時の学生にとって、西田と並び称せられる存在であったこと、また、その学問の内向性が特筆されていることに注目しておきたい。

内容のあらましと問題点

本書は以下の5編の文章から成る。

- ①「ケーベル先生の追憶」（P 3－8）、初出は『思想』1923.8、原題は「追憶」。
- ②「アミエルの日記の一節」（P 9－13）、初出は『京都大学新聞』1926.10。
- ③「知られざる傑作」（P 14－30）、初出は『文芸春秋』1927.2。
- ④「芸術批評」（P 31－36）、初出は『制作』1919.2。

⑤「美しき魂」(P37-60)、初出は『思潮』1918.10。

①は、師ケーベルへの追悼文として書かれたもの。ケーベル(1848~1923)は、ドイツ出身の哲学者で、1893(明治26)年来日し、東京帝国大学の哲学教師となった。以後長年にわたって、哲学と西洋古典語を講じ、日本の近代的な哲学研究の基礎を作り、またその人格において慕われた。深田康算、久保勉、波多野精一、和辻哲郎、西田幾多郎以下多くの学生を教え、育てている。



ケーベル(1848~1923)

①の初出誌である『思想』1923年8月号は「ケーベル先生追悼号」であり、巻頭の久保勉「ケーベル博士略伝」に続いて置かれる。他に、西田幾多郎「ケーベル先生の追懐」や、「アテネ文庫」第16編に収められる、和辻哲郎「ケーベル先生の生涯」など、数多くの文章が掲載されている。

この文章の中で、深田は、23年間の師との関係をふり振り返りつつ、「私は斯くして、私の婚約と独立とに依つて先生の手許から離れてしまった」と述べる。

事実私は意志的に又無意志的に先生から離れ去らうとしたことが無かつたとは云へない。私は私自身をアポスタータ(背教者)と考へなければならなかつたことさへ、さうして其故に心を痛めなければならなかつたことさへある。併し先生は何処までも私から遠ざかられはしなかつた。私は今殊にこの事を深く感ずる。(P5)

この内向性、ナイーブさ、そして、ありのままに自己を語る誠実さが、本書全体を一貫している。

②は、アミエル(1821~1881、哲学者、膨大な量の日記を遺した。)の日記

をたどりつつ、感懷を述べた文章である。アミエルの書き遺した文章、すなわち、「私は唯絶望的憂鬱と退嬰的静寂との間を去来してゐる許である」、「私の常住陥つて行く所のものは内に向けられたる懷疑、そのみである」、「私自身の個性、私自身の能力及び私自身の意志をば私は自ら高く買ふことはできない」、「一言にして云へば私は、私自身の中に自己を永遠に嘲罵する所の者を抱へてゐる」というような文章を抜き出して、深田は、「自己の心を見つめながら自己解剖の結果を飾りなく披瀝してゐるアミエルの魂に惹き付けられるのを感じます」と述べている。

蓮実重康「深田康算先生の思い出」（『深田康算全集』第3巻『月報』（1973.2）掲載）は、この文章について、「先生はアミエールの言葉と思想を通して、自からを語られた」と述べている。また、同全集第2巻の『月報』（1973.1）の岡部三郎「深田康算先生の思い出」は、通夜の夜、弔問客がひきあげて一段落した後、中井正一がこの文章を読み上げたことを記している。

③は、同名のバルザックの作品をたどりながら、思索を展開したもの。

⑤は、ゲーテの『ウィルヘルム・マイステルの修養時代』の「美しき魂の告白」に描かれたくフィリスのあり方から語りはじめて、人間の持つ果てしない希求の念としての「美しき魂」の輪郭を示そうとしている。

フィリスはあまりに多く自分自身の魂の為にのみ生き、精神的修養に向つてのみ目指して、自己の官能と、官能を通して存在する外の世界とに向つて己れを閉鎖したのだと云へる。強ひて云へば彼女は、自らも気付いて居た様に、肉なき魂、体なき魂である。（P43）

本書の5編のいずれの文章も、ナイーブな感受性、自己の内へ向う鋭敏なまなざし、ありのままを直視しようとする誠実さ、そして、論理的な思考力を備えている。このような内向的な、非社会的な、非生産的な省察が、大正時代の青年たちの共感を呼んだこと、そして、敗戦直後の荒廃した状況の中でふたたび求められていたことに注目したい。中で、②③⑤の文章は、西洋の文学作品

を媒介として思索が展開していくが、明治大正期の文学の問いが、あるいは文学への希求が、大正期の哲学者・美学者において受け止められていることが、確認できる第1のことである。その上で、第2に、敗戦直後の昭和23年において、大正期のナイーブなみずみずしい魂の復活が期待されていたことが確認される。先の本書巻末の「著者略歴」は、「その人格を通し巧まずして流露する珠玉の言葉は、思想の荒び芸術の頽れゆく時代に、必ずや心あるひとびとに深く訴えずにはおかぬであらう。」と結ばれている。現実的な復興や生活の再建にすべての力が費やされ、眼や心も奪われて、自己を静かに顧みる余裕もなかったであろう状況の中で、だからこそ、かえって必要なものとして、これらの文章が提出されていた。さて、この非生産的で青臭く、繊細でピュアな魂は、読者の心にどのように届き、どのような影響を与えていたのだろうか。

補足説明

吉岡健二郎「深田康算の思想とその時代」（前記『美と芸術の理論』（1971.1、白鳳社）の解説文）において、吉岡は、当時の京都大学の深田と東京大学の犬塚保治とを、西洋美学の輸入に努め、研究の基礎を作った両翼的な存在として捉えて、次のように述べる。

日本における美学研究の基礎を築いたと言える犬塚・深田両博士が一冊の著書も上梓していないということは、まことに不思議にさえ感じられるが、これは現在から振り返ってみると、両博士の学問的な良心の結果とさえ思われるのである。深田康算の場合には、その極度に内省的な性格にも原因があると思われるが、彼らは、西欧の美学思想の正確な理解と、その日本への紹介という点に献身し、国外の新思想や新芸術の傾向を声高に喧伝するよりも、美や芸術の問題について真剣に、そして大局的に思索しうような精神的風土を、日本に作り出すことを主眼としていたといえよう。（P 350）

さらに、吉岡は、深田が、夏目漱石に対して、『草枕』についての詳細な感想文を送っていたこと（1906（明治39）年9月5日の漱石の深田宛書簡、参照）に言及し、犬塚との共通性から漱石との類似性に目を移し、「彼は漱石がいう

ような近代人の孤独を、そして個人が自覚的に個人であろうとするときの孤独を肌で感じていたのであろう。そしてまた、彼の芸術論は、このような自覚的な個人をその根底とする理論であるという点に最大の特色がある」と述べている（P365）。

本書を介して、明治の精神と大正の魂が、戦後の焼け跡にどのような芽を出したのかという問いかけを提出しておきたい。

4 西田静子・上田弥生『わが父西田幾多郎』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 中内佐光、[定価] 15円、[ラストノンプル] 58、[表紙の色] 赤－茶色系。

重版 重版は確認できていない。

著者紹介

A 西田静子 にしだ・しずこ 1905（明治38）.10.14～1977（昭和52）.月日未詳
西田幾多郎の三女。

少女期に結核を発病、のちにカリエスを伴う。常々、父幾多郎の心配の種となり、その分、深い愛情を注がれ、庇護を受け続けた。病気のためもある、職業に就くことも結婚することもなく、画業等に親しみつつ、孤独の生涯を送る。上杉知行『西田幾多郎の生涯』（1988.6、燈影舎）に、短い伝がある（P169－174）。

西田幾多郎にかかわって、本書以外に、次のような編書と文章がある。

①西田静子編『父西田幾多郎の歌』（1948.10、明善書房）

静子編集の幾多郎の和歌・俳句・漢詩の選集。鈴木大拙の「序」と静子の「後記」が付されている。

②西田静子・山内得立編『西田幾多郎 寸心寸語』（1948.10、全国書房）

西田の遺したノートに記されていた断片的な文章を集め、編集したもの。

多く筆跡が写真版で付されており、山内の「後記」がある。

③西田静子「父母の憶い出」（第2次刊行『西田幾多郎全集』第4巻「付録」（月報、1965.5、岩波書店）掲載）。

B 上田弥生 うえだ・やよい 1896（明治29）.3.25～1945（昭和21）.2.14
西田幾多郎の長女。

1913（大正2）年、東京女子高等師範学校に入学。1919（大正8）年6月、上田操と結婚。4人の男子を産む。父幾多郎のもっとも信頼する娘であったが、幾多郎の死に先立つこと4カ月、1945（昭和20）年2月に急逝。上田久『続祖父西田幾多郎』（1983.1、南窓社）には、「胆嚢炎の苦痛のため、栄養失調で衰弱していた心臓が持たず、二日と床に就かず心臓麻痺を起し」と記されている。

幾多郎は晩年の自身の衰弱の中で、その死を深く悲しみ、「上田彌生の思出の記」（『続思索と体験』以後）（1948.3、岩波書店）所収）を書き、「私は七人の子を有つたが四人は既に私に先立つて歿した。次女の死によつて私は始めて我子の死と云ふことを経験したが、今は此年に至つて子に先立たれた老人の悲哀を経験した。特に情濃かに懐しかりし彼に於て」と記している。



西田幾多郎（1870～1945）

内容のあらましと問題点

本書は、西田静子「父」（P 3－36）、上田弥生「あの頃の父」（P 37－58）の2編から成る。ともに、娘による回想文であるが、前者は、1945（昭和20）年6月7日の幾多郎の死後、追悼として書かれたものであるが、後者は幾多郎の生前に、過去の生活を回想して書かれたものである。

西田静子「父」は、幾多郎の家系の記述にはじまって、その生涯にわたる、家族を中心とした伝で、わかりやすい文章で書かれている。出生のこと、兄弟のこと、学業

のこと、妻寿美^{ことみ}のこと、子供たちのこと、教え子たちのこと、「動物園」好きであったことなど、幾多郎の私生活のエピソードとプロフィールが並べられていく。そして、それぞれの時期の幾多郎の状況が写し取られている。

大正十二年の九月に田中飛鳥井町のいまの家が出来ましたので、病床の母はつり籠に寝たまゝで新しい家へ移りました。

山内得立氏、久松真一氏、務台理作氏などが荷物を運んで下さったと思ひます。（中略）

父と遊んだ中で忘れられない事は氷合戦をした時の事です。父が台所から女中に氷のかけをもらつて来て私達の衿首に入れたのが初まりで、私と妹と二人でキヤツキヤツといつて父の首にしがみついて、脊に氷を入れたいのですが、かへつて負けさうになるので二階へ下へと家中をかけまわり、結局私達二人はまけてしまったことでした。しかし考へてみるとこの頃の父は病床の母と病気で入院中の妹とその上あまり健康になれない私と、三人の病人を抱へていたのです。大正十四年の一月、母は遂に亡くなりました。父は相談相手もなく、暗く淋しく書斎にとちこもる日が多く、外出さえもあまりしなくなりました。（P26）

また、この幾多郎が、1933（昭和８）年に再婚してから、「ずっと気持が明るくな」った（P32）と記し、家庭内でのありのままの表情を伝えている。

最愛の父を失った娘の、情愛のあふれる文章であると同時に、自分がもっとも長く幾多郎の側にいた者であり、もっともよく父を見、父を知っていたという主張を含み込んでいる。

上田弥生「あの頃の父」は、三木清「西田先生のことども」（『婦人公論』1941（昭和16）年8月、三木『読書と人生』（1942.6、小山書店）所収）を読んで、上田弥生が、書かれてあった1917（大正6）年ころの生活を懐かしく思い出して書いた文章である。幾多郎の実家、金沢で育ち、石川県立第一高等女学校から「お茶の水の女高師」に進んだ弥生が、1917（大正6）年に卒業して京都生活をはじめ、1919（大正8）年に上田操と結婚するまでの2年間、幾多郎と同居していた時代を中心に、「四高教授時代」の思い出にもさかのぼりながら、生活を語り、交友や教え子たちの様子を語り、さらに『善の研究』のこ

とに及んでいく。

「本当に私達の父は一日考へざれば喰はざる様な人であつた。親類の交際や出入りの事は皆母や祖母がする。子供は幾人あつても父は一日読み一日考へて居た」と述べる（P53）。そして、『善の研究』にかかわって、幾多郎が「著書は四十歳を過ぎてからにする。三十代では著書を出さぬ。年取つてから本を一冊遣せばよい」と言っていたことを紹介し、「おそらく父は三十歳から四十歳を過ぐるまで来る朝も送る夕も一つの「善の研究」の為に魂を打ち込んでゐたのであらう」と思い遣っている（P54-55）。

京都大学の助教授に転じた時、故山に母を訪うて、「これから本当に専門の哲学で食を得られる様になつた。」と言つた。父の数へ年四十歳の秋であつた。京都大学へ来て暫して第一の著書が出た。祖母と母との喜は想像以上であつた。それから数冊の本を書き、今でも何か研究し続けてゐる。あの雪深く長い金沢の夜に、五分芯のランプの芯をかきたてながら、丹念に半紙に書き記し、書き直して居た頃の父が、今日の己の姿を心に描いたであらうか。祖父の歿年六十一歳も十年余の以前に過ぎた。父は親切な沢山の御弟子さん達と、父に好感を持つて下さる世間との間で幸福に老後を養つてゐる。（P56）

教養を思わせる、秀でた文章力によって書かれた文章であり、父への愛情に満ちた、温かい眼を感じさせる。

なお、この文章は、上田久『祖父西田幾多郎』（1983.11、南窓社）にも採録されている。

5 木村素衛『花と死と運命』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 中内佐光、[定価] 15円、[ラストノンプル] 62、[表紙の色] 赤-茶色系。

- 重版** 3版 1949（昭和24）年6月10日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 久保井理津男、[定価] 30円。巻末に「アテネ文庫」のリスト1頁を付加。
- 4版 1951（昭和26）年2月15日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 酒井明、[定価] 30円。巻末に「アテネ文庫」の広告1頁を付加。
- 6版 1954（昭和29）年12月15日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 八坂浅太郎、[定価] 30円、表紙のデザインが変わる。巻末に「アテネ文庫小辞典」のリスト1頁を付加。
- 8版 1961（昭和36）年6月30日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 中村正光、[定価] 50円、表紙のデザインは6版と同じ。色は緑色系に変わる。背の下段に「★」が1つ付く。岩波文庫に倣って、定価を示したもの。巻末に「アテネ文庫小辞典」のリスト1頁を付加。

刊行12年目になお版を重ねていることが確認され、ロングセラーであったことが知られる。

著者紹介

木村素衛 きむら・もともと 1895（明治28）.3.11～1946（昭和21）.2.12
哲学者、美学研究者、教育学研究者。

1923（大正12）年3月、京都大学哲学科選科修了。広島文理大学助教授を経て、1933（昭和8）年5月、京都帝国大学文学部助教授となる、教育学教授法を担当する。進めてきた美学研究から教育学への転身に一時は迷うが、次第に教育学に情熱を傾け、特に信州での活動に力を入れる。1940（昭和15）年より教授。1946（昭和21）年、風邪をおして信州へ講演に行き、上田市で体調をくずし、京都大学在任中に急逝。

哲学及び美学上の著作として、『フィヒテ』（1937.9、弘文堂書房、「西哲叢書」第16編）、『表現愛』（1939.9、岩波書店）、『美のかたち』（1941.2、岩波書店）、『形成的自覚』（1941.11、弘文堂書房）などがあり、教育学上の著作として、『国家に於ける文化と教育』（1946.2、岩波書店）がある。他に、随筆集

『草刈籠』（1942.3、弘文堂書房）、『雪解』（1947.2、能楽書林）があり、本書のような「日記抄」（後述する）がある。「アテネ文庫」においては、本書の他に、第48編『紅い実と青い実』（1949.3）、第113編『ミケルアンジェロ』（1950.7）の2点が刊行されており、前者は日記抄、後者は『表現愛』の2論文を収めたものである。

また、『表現愛』は、のちに、南窓社より再刊され（1968.6）、さらにこぶし書房より再刊されている（1997.9）。選集としては、『美のかたち』の全論文と『形成的自覚』の一部を収録した『美の形成』（村瀬裕也編、2000.7、こぶし書房）があり、また、『美のかたち』の全論文と『表現愛』の一部ほかを収録した『美のプラクシス』（岩城見一編、2000.7、燈影舎、「京都哲学撰書」第7巻）がある。著作の数は少ないが、現在に至るまで再刊が続き、読み継がれてきていることに注目しておきたい。

内容のあらましと問題点

木村は大量の日記を遺し、京子夫人は、折りにふれて、その中から時期を区切って、抄出した「日記抄」を刊行している。主な部分は以下の4つである。

- ①1919（大正8）年～1923（大正12）年の日記抄……「魂の静かなる時に」と題されるもの
- ②1929（昭和4）年～1932（昭和7）年の日記抄……「紅い実と青い実」と題されるもの
- ③1934（昭和9）年～1937（昭和12）年の日記抄……「花と死と運命」と題されるもの
- ④1941（昭和16）年～1945（昭和20）年の日記抄……「夕映」と題されるもの

②と③は、それぞれ「アテネ文庫」の各編が初出であり、初刊である。①は、単行本として刊行されている（1950.10、弘文堂）。④の初出は未詳。のちに、これらの4編は1冊にまとめられて、『花と死と運命 日記抄』（1966.1、木村素衛先生日記刊行会）として刊行されている。同書はさらに信州地方で再刊行されて（1983.1、木村素衛先生日記刊行会）、最近では、③（本書の部分）を

除いた、①②④の３編を収録した『魂の静かなる時に』（1989.10、燈影舎）が刊行されている。

刊行の経緯は複雑であるが、目立たないながらも継続的に読者を得ていることが確認される。

本書の内容は、1934（昭和９）年６月から1937（昭和12）年11月までの木村の日記の抄録であるが、巻末に京子夫人の「跋」（P58－62）があり、次のような言及がある。

この間の日記は中版四帖とじのノオトにすき間なく書かれたのが三冊半の分量になってゐる。木村が丁度広島文理大から京大の教育学に転任になつて間もなくの頃であつた。哲学から教育学に代るといふ事に数ヶ月苦しむ、その苦しみのぬけ切れぬまゝ、に学位論文を書いて居てとうとう過労と神経衰弱とで病気になる、田辺先生の御好意で二年間大学を休ませて頂いた。（P58）

夫人は、夫の「殆ど病氣中」の時期を、６才、５才、４才の「三人の年子」を抱えてしのぎ、「あの二年間は私にとつても誠に苦難の年であつた」とふり返っている（P58）。そして、「間もなく三回忌がめぐつて来る」と現在のわが身にもどって、「亡くなつた当時よりこの頃になつて非常に寂しい気がする」と述べている（P61）。なお、「日記は高坂さん（正顕氏）の御好意で出す事になつた」と記している。

日記の本文において、木村は、交際・交友や身の雑事をあれこれと記しながら、時に長い感懷にひき込まれ、時に哲学上の思索に沈潜する。例えば、次の文章は、長男明彦が、「読本」の「単純なみがきの少い詩」に「悲しい見たいやね」と感想を漏らしたことから、「明彦よ、お前も亦父の如く美しきものの前に涙する霊を持つて生れたのであろうか」と問いかける。

併し不思議なのは、人間と云ふものゝ心が美に悲しむと云ふ事実だ。吾々の世界は唯その事だけでも素晴らしいものだ。父は不幸にしてその理由を考へる事を好む、否時としてはそれが捨て度くてならない負担でさへある。（P9）

時に長くなる日記のありのままに語られる感懐、随想風で哲学的な思索が、多くの読者の共感を呼んだといえる。

私はこんなに自然が美しく荘厳され、而も一定のロゴスを以てそれが行はれてゐるのを見る時、花の存在は単に種の存続の為めのみとは考へられぬ気がする。美しい数の比が葉を形造るにも、花を形造るにも、掟として作らき、そしてそのロゴスが色と香とを伴つてあの様に咲いて出るのではないか。花はより大なるその目的を美を現はす為めに持つのでないと誰が云へよう。世界は美しい数のratioで出来て居り、そしてそれが実際植物のいのちを支えているのではないか。十八世紀の人々が世界の秩序の美しさからしてその創り主として、限りなき叡知の存在を考え、又昔ギリシヤ人達が世界をハルモニアと考えたりしたと云ふ事は、実際素直な観じ方でさえなかつたか。

私はこの様に美しく神秘的な自然の荘厳を見るとき、時が来て花が何の未練もなくひらひらと散つて行つて行く様に、人間も亦その自然の死を、あの様に未練なく受けて行つてゐるものゝ様に思ふ。(P28-29)

自分の心に浮かび生ずる思索や煩悶が、ありのままに写されており、矛盾や過敏さや誇張、さらには感傷をともなつた、未熟で幼い感懐が、真摯で誠実な文章で綴られていく。第3編の深田康算『美しき魂』の場合と類似する、内向的でピュアな、非生産的で非社会的な魂が認められる。「アテネ文庫」は、そのような「美しき魂」を敗戦後の現実に対して提供する。それはまた、「書誌」の重版の経過に見られるように、多数の読者の支持を以て報われたのである。

補足説明

本書はまた、西田幾多郎をはじめとする「京都学派」の過去の交友の記録として、有名な著作家たちの交流やプロフィールを紹介するエピソード集としても読むことができ、そのおもしろさにおいても人気があったと考えられる。記されている人名を拾っておけば、和辻哲郎 (P3-4)、西田幾多郎 (P30-31)、久松真一 (P32) など、同世代の高坂正顕・下村寅太郎らとの交遊についてはひんばんに記されている。また、1937 (昭和12) 年5月2日の日記には、相原

信作・下村寅太郎と3人で、奈良の上高畑に志賀直哉を訪ねた体験が詳細に記されている。志賀のきさくな対応や、『座右宝』のこと、全集出版のことなど、そのときの数々の話題が記され、「志賀さんの観照力は随分恐ろしい力だとしみじみ感ぜさせられ」たとする。「それにしても、一時から十時四十分迄と云ふのはどうも気の引ける長居であつた」とふり返っている（P37-41）。

6 青木正児『抱樽酒話』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 島富士雄、[定価] 15円、[ラストノンブル] 60、[表紙の色] 赤-茶色系。

重版 重版は確認していない。

著者紹介

青木正児 あおき・まさる 1887（明治20）.2.14～1964（昭和39）.12.2
中国文学研究者、随筆家。

1911（明治44）年、京都帝国大学支那文学科卒業。狩野直喜、鈴木虎雄、内藤虎次郎に師事、幸田露伴、藤井乙男らにも学ぶ。1920（大正9）年、友人の小島祐馬、本田成之らと中国文学研究の同人誌『支那学』を創刊、以後誌上に、清新で充実した論文を数多く発表した。東北大学文学部助教授、同教授を経て、1938（昭和13）年、京都大学文学部教授となる、1947（昭和22）年、退官。以後も、山口大学、立命館大学等で教鞭をとった。

中国文学の研究者としては、元代の戯曲、漢詩とそれについての評論などから、中国の現代文学や中国文学の日本への影響、さらには日本の近世の文学まで、幅広く研究を展開し、数多くの著作をあらわした。『支那文芸論叢』（1927.4、弘文堂書房）、『支那近世戯曲史』（1930.4、弘文堂書房）、『支那文学思想史』（1943.4、岩波書店）、『清代文学評論史』（1950.1、岩波書店）など。これらの研究書の他に、広い学識に基づいた随筆集として、『江南春』

(1941.11、弘文堂書房)、『中華名物考』(1959.6、春秋社)、『酒中趣』(1962.6、筑摩書房)などがある。これらは、『青木正児全集』全10巻(1969-75、春秋社)に収録されている。

内容のあらましと問題点

巻頭に「はしがき」があり、本文は「酒茶論」(P5-18)、「瓶蓋病」(P18-25)、「止酒の詩」(P26-35)、「中酒の奇習」(P35-42)、「大酒の会付酒令」(P42-52)、「琥珀の光」(P52-60)の6章からなる。どの章においても、酒をめぐって、中国や日本の過去の時代にさかのぼり、古い文献にひたって、卑俗な話題が、広い学識と格調の高い文章によって語られている。

「はしがき」の冒頭に、「先頃私は酒徒の天国を痴想した戯作一篇を草して「陶然亭」と題し、「抱樽病夫」の仮名で雑誌「智慧」に掲載した。すると此の度弘文堂で「アテネ文庫」を叢刊するに付き、早速酒の話を私に割当て、「抱樽酒話」と云ふ題まで考へて来てくれた。」とあり、「弘文堂から酒話を一冊と頼まれては、義理にも断るわけにゆかぬ」と記している。

敗戦という現実とはかかわりのない、現実離れしたエッセイは、逆に時代の希求として、広く求められていたものでもあっただろう。それは、一時、現実を忘れさせるいこいの場であり、いやしをもたらすものでもあったといえる。深田康算や木村素衛の「美しき魂」と比べてみると、暗く厳しい現実から隔たっているという点において共通性があり、聖と俗、純粹さと蕪雑さ、青臭さと老練さというようなものさしにおいては、まったく対極に位置するものである。

例えば、第2章の「瓶蓋病」では、まず、アルコール中毒を「瓶蓋病」と言いなおしているところにおもしろさがあるのだが、学問的に中国の文献をたどり、時代を追いながら、アルコール中毒の歴史を明らかにし、各時代の政治とのかかわり、政策による消長を追求していく。

漢も武帝の頃になると国力発展の為に多くの費用を要したので、政府の財源として酒醸造の利に目を付けたのが塩鉄の専売制を創設して有名になった桑弘羊で、天漢三年

に彼は酒の専売をも始めた。かうなると酒を禁ずるところか飲んでもらふほど政府は儲かる。瓶蓋病者は政府のよい顧客と云ふことになったわけである。尤も酒の専売は武帝の死後廃せられたが、其れからは泰平が続いて国は富み、それから後漢にかけて生活が奢侈になつたので、酒は益々飲まれるやうになつたであらう。然し後漢時代は儒教が盛んであつた為に礼法がやかましく、たとひ「酒は量無し」とするも「乱に至らず」の教が守られたであらうが、漢末の乱世に至り儒教は威信を失つてしまつたので、酒徒は大いに暴れ出した。其の最も跋扈したのは魏晉の間である。此頃の瓶蓋病者の痛快な逸話は「世説新語」や「晋書」に少なからず散見してゐて、さながら酒徒に関する故事の淵藪を為せる観が有る。(P23-24)

読者は、例えば『三国志演義』の張飛翼徳を思い浮かべながら、この博学の弁舌を楽しんだらう。また、第3章「止酒の詩」では、陶淵明以下、歴代の詩人の禁酒にかかわる詩が列挙され、まじめに鑑賞されていく。このような聖と俗とを取り混ぜ、もったいぶった権高さや高慢さを打ち砕こうとする、青木のしなやかな、またしたたかな手法は、読者にとって一服の清涼剤となる。国家の学の間、かつての官としての大学の権威者が、卑俗な話題をアカデミックな方法で語るといふ、偶像破壊的なおもしろさは、庶民に大きな笑いを提供し、拍手喝采を浴びたと想像される。戦争中の格式ばった権威主義を打ちやぶり、学術という視座を、より平易で日常的な位置にとり戻してきたともいえる。

なお、青木は、「アテネ文庫」第132編として『酒の肴』（1950.10）を執筆、刊行している。酒に続いて、「肴」を話題として、同様に中国や日本の過去の文献を渉獵した、エッセイ集である。のちに、この2書は、増補され、かつ「酒顛」という「中華の底ぬけ上戸どもの逸話」（「酒中趣の序」）の日本語訳を加えて、『酒中趣』（1952.6、筑摩書房）として再刊行されている。さらに、のちに、『酒の肴・抱樽酒話』（1989.6、岩波文庫）として再刊されており、現在まで版を重ねている（第7版、2006.7）。

補足説明

弘文堂書房は、西田幾多郎を師とする「京都学派」に限らず、京都帝国大学・京都大学の教授たち・研究者たちとの結びつきが強い。大正期には、まず

専門書の出版を通して結びつきが始まり、昭和期には、弘文堂書房が、より教養的な一般書に手を広げていくことにともなって、ますます拡大していく。中国文学の分野においては、内藤虎次郎（湖南）や鈴木虎雄の専門的な著作の刊行があり、1927（昭和2）年4月に刊行された、青木の初期の研究論文集である『支那文芸論叢』も、出版社は弘文堂書房である。その「自序」において、小島祐馬らと編集した雑誌『支那学』の創刊（1920（大正9）年9月）の経緯を語っているが、そこに、青木と弘文堂書房とのかかわりの始まりが記されている。雑誌『支那学』は、当初、彙文堂からの刊行を予定していたが、彙文堂店主の病気のため不可能になり、弘文堂書房に変更された。

小島君弘文堂書房と旧知あり、之をして代らしめんと欲すと雖も累を彼に及ぼさんことを慮りて敢て言はず。嘗て歎を河上肇先生に漏す、先生以て弘文堂主に告ぐ、堂主先生を信ずること篤し、乃ち小島君に造り、身を挺して之に当らんことを請ふ。余偶ま坐に在り、喜び禁ずる能はず、遂に本田君と相謀りて、弘文堂を煩はすに至れり。（P6）

以下、「自序」は、『支那学』の成功を記していくが、河上肇と弘文堂書房との結びつきが、青木たちにも伝播していたのである。

なお、小島祐馬も、「アテネ文庫」において、第50編『中江兆民』（1949.3）、第112編『中国共産党』（1950.7）の2書を執筆、刊行している。

7 高坂正顕『実存哲学』

書誌

初版 1948（昭和23）年3月15日印刷、1948（昭和23）年3月25日発行。〔発行所〕弘文堂書房、〔発行者〕八坂浅太郎、〔印刷者〕島富士雄、〔定価〕15円、〔ラストノンプル〕62、〔表紙の色〕緑色系。

重版 2版 1948（昭和23）年6月5日発行。

8版 1951（昭和26）年5月30日発行、〔発行所〕弘文堂、〔発行者〕酒

井明、〔定価〕30円。巻末に「アテネ文庫」の広告1頁を付加。

13版 1955（昭和30）年2月25日発行、〔発行所〕弘文堂、〔発行者〕八坂浅太郎、〔定価〕30円、表紙のデザインが変わる。巻末に「アテネ文庫 目録」「西哲叢書既刊分」のリスト計5頁を付加。

17版 1958（昭和33）年1月25日発行、〔発行所〕弘文堂、〔発行者〕八坂浅太郎、〔定価〕30円、表紙のデザインは13版と同じ。巻末に「アテネ文庫小辞典」のリスト1頁を付加。

18版 1959（昭和34）年1月5日発行、〔発行所〕弘文堂、〔発行者〕八坂浅太郎、〔定価〕30円、表紙のデザインは13版と同じ。巻末に「アテネ文庫小辞典」のリスト1頁を付加。

10年以上にわたって、頻繁に版を重ねていたことが確認され、ベストセラーであり、ロングセラーであったことが知られる。



初版表紙



17版表紙

著者紹介

高坂正顕 こうさ
か・まさあき 1900
（明治33）.1.23～1969
（昭和44）.12.9
哲学者。

1923（大正12）年、
京都帝国大学哲学科卒業。
西田幾多郎に師事し、「京都学派」の中心

の一人となる。東京文理大学助教授を経て、1940（昭和15）年、京都帝国大学教授となる。アジア太平洋戦争中は、西谷啓治・高山岩男・鈴木成高らとの座談会「世界史的立場と日本」（『中央公論』（1941.11）、1943年、単行本として中央公論社より刊行）などにより、戦争を推進する主張を行ない、戦後、公職追放を受けた（1946－1951）。追放の解除後、関西学院大学教授を経て、1955（昭和30）年、京都大学教育学部教授となる。その後、東京学芸大学学長など

を歴任。また、中央教育審議会特別委員会の主査となり、「期待される人間像」などの答申をまとめた。

カント哲学、実存主義哲学など、西洋の哲学を幅広く研究し、哲学一般、歴史哲学、日本の思想などについて、独自の見解と史的体系を作る。主な著作としては、『歴史的世界』（1937.10、岩波書店）、『カント』（1939.10、弘文堂書房、『西哲叢書』15）、『民族の哲学』（1942.4、岩波書店）、『明治文化史』第4巻『思想言論編』（1955.3、洋々社、のちに1980.6、原書房より再刊）などがあり、師西田幾多郎にかかわる研究書および回想に、『西田幾多郎先生の生涯と思想』（1947.12、弘文堂書房）、『西田幾多郎先生の追憶』（1948、国立書院、1996.4、燈影舎より再刊）、『西田哲学と田辺哲学』（1949.11、黎明書房）、『西田幾多郎と和辻哲郎』（1964.10、新潮社）などがある。これらをまとめたものとして、『高坂正顕著作集』全8巻（1964－1970、理想社）があるほか、燈影舎刊行の『京都哲学撰書』において、第1巻に『明治思想史』（1999.11）、第25巻に『歴史的世界』（2002.10）が収められ、再刊されている。

「アテネ文庫」においては、本書の続編として、第31編『続実存哲学』（1948.9）が、さらに第81編『ニーチェ』（1949.10）が執筆、刊行されている。また、第46編の座談会『実存と虚無と頽廃』（1949.3）に、和辻哲郎、務台理作、西谷啓治とともに参加している。

本書『実存哲学』から『続実存哲学』『ニーチェ』と続く3冊は、一連の西洋現代哲学への追究であり、新しい時代における自身の足場を見なおそうとする試みでもあったのであろう。当時の高坂は、公職追放を受け、収入の道を断たれた中で、京都に留まって必死に研究に打ち込み、自分の哲学を探り求めている。そして、この3冊を書き上げ、さらにこれらを「アテネ新書」第7編の『現代哲学』（1950.3）に吸収していくことで、より大きな体系化を図っていくことになる。高坂の没後、高山岩男と辻村公一は、高坂の「未完の著述」であった『西洋哲学史』の現代の部分、これらで補完し、ギリシャ哲学から現代哲学までを覆う700頁を超える大著として編集、刊行している（1971.6、創文社）。高坂は、このような大局的な著述、広い視野を要求される課題において

本領を発揮するような資質を備えた哲学者・研究者であったと考えられる。

内容のあらましと問題点

本書は、「緒言」（P 3 - 4）、「第一章 実存概念の史的背景」（P 4 - 12）、「第二章 キェルケゴオルに於ける実存の問題」（P12 - 36）、「第三章 ハイデッガーに於ける実存の解釈学」（P36 - 59）、「結語」（P59 - 62）の各部からなり、「実存」という概念の由来を確認した上で、キェルケゴオルの哲学上での「実存」の意味や意義、また、ハイデッガーの哲学上での「実存」の意味や意義を追究し、そこに一貫するものを見極め、明確化し、さらに批判的に捉えようとしている。この考究は、続編の『続実存哲学』では、「ニーチェに於ける歴史の実存」「ヤスペルスの実存哲学」「存在と無」と展開していく。「緒言」において、執筆の意図が、「今次の大戦を境としてサルトル等の文芸的・思想的な作品を生み、世界の人々の関心の的となつてゐる」、「実存哲学」の「大体の性格なり、特徴なり、更にはその限界をも示してみたいと思ふ」と述べられている。「実存」というもっとも新しいキーワードを手がかりにして、西洋の現代哲学を大局的に捉え、西洋で話題の中心となっているサルトルに及ぼうとする、もっとも新しい、もっとも現代的な追求であった。それゆえに、戦争中は閉じていた西洋の現代への目を見開いたばかりの敗戦後の日本において、競って読まれ、版を重ねていったのである。

「結語」において、高坂は、「実存哲学の意義」だけではなく、「その限界」ふくめて総括を試みている。それは、3つの点に絞って述べられている。

その意義は第一に、人間存在—実存—の底に潜み、それを虫々深い虚無 Nihil 或は無 Nichts を哲学的考察の正面に浮び上らした点である。しかし無の真相はそれで尽くされてゐるであらうか。彼等の言ふ無は、消滅の無であつて、創造の無ではない。真の無、絶対無は、殺すと共に活かすものであらう。（中略）

第二の意義は、実存の主体性を明かにした点である。確かに実存は単なる生命でもなく単なる物質にもつきない。かかる実存を主張するところに、実存主義が生れの哲学でもなく、唯物論でもない所以がある。それは認められてよい。だが単に実存を生命と物質とから引き離すだけでは、生命の問題も物質の問題も解けない。それらの問題は

切り棄てられただけで、解決されたのではない。(中略)

第三に実存主義の功績は、哲学を単なる思弁のこととせず、決意により、自己の在り方を実存的に更新し、高め、変革させることによつて、哲学的真理に達し得るとする実践的性格にあるであらう。確かに哲学は、自己の全存在を賭し、「魂の瘡痕を以つてする思惟」であらう。そこには飛躍 Sprung と挫折 Scheitern がなければならない。だがそのことは特にキェルケゴオルに見られるやうに、哲学体系の断念であつてはならない。飛躍するためには足場がなければならない。哲学体系が実はその足場なのである。(P60-61)

高坂は、大づかみながら、「実存主義」の意義と限界を捉えようとしている。そして、それを同時代の場に指し示し、また自身にも突きつけようとしている。ひとつひとつの考察の当否には賛否があり、こうした論理そのものの有効性についても十分な検討が必要だろうが、意図の大きさと真摯さ、そして、そこから、時代や自分にとって大切な何かをつかみとろうとする熱意は十分に評価できるものであろう。

8 ヨハネス・ラウレス『きりしたん大名』

書誌

初版 1948(昭和23)年3月15日印刷、1948(昭和23)年3月25日発行。[発行所] 弘文堂書房、[発行者] 八坂浅太郎、[印刷者] 島富士雄、[定価] 15円、[ラストノンブル] 60、[表紙の色] 赤-茶色系。

重版 2版 1949(昭和24)年7月10日発行、[発行所] 弘文堂、[発行者] 久保井理津男、[定価] 30円。巻末に「アテネ文庫」のリスト1頁を付加。

著者紹介

ヨハネス・ラウレス Johannes Laures 1891.11.21~1959(昭和34).8.3
ドイツ人、カトリック教宣教師、日本のキリシタン史の研究者。

1913年、イエズス会に入会。早くから日本宣教を志し、司祭叙階後、ウッド

ストック大学、コロンビア大学、ベルリン大学などで学び、1928（昭和３）年11月来日、上智大学の経済学部教授となった。はじめは経済学を教えていたが、キリシタン史の研究に力を注ぎ、多くの研究成果を挙げる。キリシタンにかかわる文献を収集して、上智大学に「キリシタン文庫」を創設した。1942（昭和17）年8月、文学部に史学科が創設され、ラウレスは初代の史学科長に就任。戦争の時代を、ロゲンドルフ（1908～1982、「アテネ文庫」において、第30編『キリスト教と近代文化』（1948.9）、第80編『カトリシズム』（1949.10）の2書を執筆、刊行している。）をはじめとする、上智大学の外国人教授陣とともにしのぎ、戦後にはいくつもの著作を刊行した。病に罹り、教授在任中に病死。

主な著作として、『Kirishitan Bunko』（1940、のちに、『吉利支丹文庫』新訂第3版、1985.11、臨川書店）、『高山右近の生涯』（松田毅一訳、1948.3、エンデルレ書店）、『聖フランシスコ・ザヴィエルの生涯』（松田毅一訳、1948.11、エンデルレ書店）などがあり、キリスト教史の教科書を兼ねた著作として、『キリスト教的ヨーロッパ史』（長寿吉訳、1954.2、中央出版社）がある。

内容のあらましと問題点

本書は、「序言」（P3－4）と、「大友宗麟」（P5－25）、「小西行長」（P26－43）、「蒲生氏郷」（P44－50）、「黒田孝高」（P51－60）の4章から成る。他の著作と同じく、原文はドイツ語で書かれた思われ、巻末に「山辺二郎訳」と記されている。

「序言」の日付は、「一九四七年十一月三十日」。その文中で、ラウレスは、「本書はごく簡単に、かの世紀の四人の大名が、全身を打込んでキリスト教に帰依し、彼等の高邁な理想を自分の生活において実現せんとした事実を述べるものである。」としている（P3）。さらに、「最大のきりしたんは疑ひもなく高山右近である。しかしこの小著をもつてしては、彼を公平に取扱ふことはとうてい出来ないことであるから、彼に關しては別の後著にその評価をゆづることとしたい」と述べている。『高山右近の生涯』については後にふれるが、その刊行（1948年3月）は本書とほぼ同時である。「序言」の日付の時点では、まだ刊行が確定していなかったのであろうか。『高山右近の生涯』には、「昭和二

十年降誕祭に脱稿」という記載があり、本書の方がのちの成立であり、高山右近研究の余滴、副産物にあたると考えられる。

また、「序言」の冒頭には、「日本人の心情は性来キリスト教的である。これは最初の宣教師を快よく迎へたことや、またこの民族の指導者達が、キリスト教を愛と熱狂とをもつて受け入れたことがそれを証明してゐる」と記されており、戦争によって極めて制限されていた、日本人とキリスト教との関係を復興し、修復していこうとする意志がうかがえる。

4つの章は、史料をふまえながら、4人の事跡、生涯、評価を述べていく。「大友宗麟」の章では、「彼は、キリスト教が日本の政治的独立に何等害するものではないばかりか、精神的文化的に日本を向上させる好適の手段であることを看破してゐたからこそ、キリスト教の保護者となり、奨励者となつたのである」(P24)と述べているが、この文章も、敗戦後の日本に置いて見ると、戦争中の敵対を友好に変えていこうとする意図が認められる。

「小西行長」の章では、「反逆者の烙印」を押されてきた行長を汚名からすくいあげ、「英雄的忠誠の尊い犠牲」と高く評価しなおそうとしている (P38)。ラウレスは、「戦前の日本では、行長の敵加藤清正を日本武士の典型としてゐた。」(P38)と述べて、日本の古い価値観は今は覆されるべきであることを示唆する。

加藤清正が三五〇年の長きにわたつて、英雄と崇められて来た一方、剛毅と軍人的素養の点では確かに幾らか劣る行長は、卑怯者とみなされてきた。といふのも、彼が切腹して不名誉な死を免れる事をしなかつた為である。(中略) 彼はこの方法を取らうかと思つたことも再三ではなかつたが、キリスト教の道德律が自殺を禁止してゐるので、この誘惑を克服しこの不当な不名誉な死を、神の手から喜んで受けたのである。かくて彼は事実信仰の犠牲となり、真の殉教者となつたのであるが、異教徒たる日本人一般に誤つて賞讃されてゐた非人情な切腹を中止したからと云つて、彼を卑怯者呼ばはりすることは不当である。(P39)

戦国時代、抑圧に耐えてキリスト教の信仰を貫いた者の足跡をたどることは、

単に過去の人物についての評価を改めることにとどまらず、現在、本書を読む読者に向かって、すなわち、戦争中の抑圧から解放された人々に対して、進むべき道を示すことにつながる。今やその道が開かれていること、進むことを妨げるものがないことを、ラウレスは主張したかったのであろう。

補足説明

前述した『高山右近の生涯—日本初期基督教史—』は、従来の高山右近の研究を大きく進歩させたものであり、学術的な著作として高く評価された。それは、日本側の史料だけでなく、外国人宣教師の側の史料、つまり、宣教師が提出した報告や書簡を参照し、未刊の稿本文献を数多く引用したことによる成果である。しかし、このような学術書にも、戦争中に制約されていた関係を拡大し、誤った宣伝による誤解を解き、親愛の関係に変えていこうとする意志が伏在している。

『高山右近の生涯』には、巻頭に「駐日教皇使節」パウロ・マレラの「序」が置かれている。そこに次のような記述がある。

右近こそは現在この国民に模範たるに最も適した人物であると信じられる。(中略) すべてを最初から行はねばならなかつた当時にあつて、少数の宣教師達は、国内で殆んど援助者を見出し得なかつた。今日我等も亦すべてを新たに始めねばならぬのであり、信徒の数も右近の改宗の当時より少い有様である。それ故教会は稔れる収穫を前にして、右近の当時と同じやうに信徒に援助を求めてゐるのである。(P2)

パウロ・マレラは、「駐日教皇使節」としての立場から、この本が、信徒の拡大と援助者の獲得につながることを期待している。敗戦後の日本において、日本人の中から、再び右近のような存在が出現してくることが待ち望まれていたのである。

ただ、ラウレスの期待は、そのような教会の立場からのものだけではなかつたようである。彼は、「はしがき」において、次のように述べる。

高山右近こそは、日本教会中、最大の英雄的人物たと共に、当時の最大人物であつ

た。従つて、世界キリスト教界にあまねく紹介さるべきはもとより、日本キリスト教徒は彼を祭壇上に仰ぐ日を渴望してゐるのであつて、ヨーロッパの言語を以てする彼の伝記をものすことは、今日まで未だ何等の伝記が外国語でものされたことがないのに鑑み、彼等偉大な日本人にとつて、大いなる快事に相違あるまい。

ラウレスにとっては、むしろ日本人の中に右近のような人物がいたことを西洋に宣伝し、日本人に対する評価を高めることもねらいのひとつであつたと考えられる。関係の修復は、ただ日本人に対して、閉ざされていた扉を開いて、外に出てくるように説得するだけでは得られない。むしろ、迎える側の西洋が、日本人に親愛の情や尊敬の念を持つようにならなければ、本当の友好関係は生まれてこないだろう。ラウレスはそのことを考え、ドイツ語で書かれた「高山右近の生涯」を刊行しようとしていたといえる。しかし、戦後の状況の中で、ドイツでの刊行は困難であつたようで、日本語訳の刊行が先行している。

ドイツ語で書かれた高山右近伝を刊行し、西洋にすぐれた日本人の存在を訴えること、一方で『聖フランシスコ・ザビエルの生涯』において、かつて日本人とキリスト教とを結びつけた聖人の伝を公刊することは、ともに真摯に相互の友好関係の樹立をめざしていくことにつながる。また、上智大学での「吉利支丹文庫」の整備と、教科書ともいふべき『キリスト教的ヨーロッパ史』の刊行も研究者・教育者としての貢献である。ラウレスは、それぞれに自身の置かれた現実に目を奪われ、自身の打算を行動の動機とするものの多い、戦後の日本にあって、確かに温かい視点に裏付けられた、真摯な貢献を実現している。戦中を日本でしのぎ、戦後の日本を、目立たないながらも、確かに温かいまなざしで見守った、ドイツ人がいたことを



ヨハネス・ラウレス (1891～1959)

特筆しておきたい。

『上智史学』第5号（上智大学史学会、1960.10）において、橋口倫介は、前年8月のラウレスの死に対して、「NECROLOGY ラウレス師を悼む」を掲載し、「一九二八年来朝以来、師のわが学界に貢献された処は誠に偉大であった」と記し、また「碩学であったと同時に、師は敬虔にして熱烈なる司牧者であった」と述べている。同号、および、第7号（1962.6）にラウレスの著作目録が掲載されている。

